

## コロナ禍以降の社会環境における郊外の空き家利活用の可能性

—神奈川県海老名市での工房付きアパートメントの改修を通して—

主査 井上 岳\*<sup>1</sup>

委員 齋藤 直紀\*<sup>2</sup>, 大村 高広\*<sup>3</sup>

### 「郊外の空き家活用を通して家の価値を再考する」

本実践活動の目的は、設計を行った工房付きアパートメントの改修事例を通して、パンデミックや空き家の増加による社会環境の変化における「家」の新たな価値を明らかにすることである。そこで、改修計画の設計・運営・改善・開示のためのリサーチとして、建築分野以外の 専門家・芸術家と「引越し」についての対話、分析を行い、本実践へとフィードバックすることで全国に存在する郊外の空き家の改修・運営の方法を示したいと考えている。

キーワード：1) パンデミック, 2) 工房付きシェアトリエ, 3) 郊外, 4) 空き家, 5) リノベーション,  
6) アーティスト, 7) リサーチ, 8) 運営, 9) テレワーク, 10) 共同運営

## THE POTENTIAL FOR UTILIZATION OF VACANT SUBURBAN HOUSES IN THE POST-CORONA DISASTER SOCIAL ENVIRONMENT

-Case study of renovation of an apartment with workshop in Ebina City, Kanagawa Prefecture-

Ch. Gaku Inoue

Mem. Naoki Saito, Takahiro Ohmura

### Rethinking the Value of Homes through the Utilization of Vacant Suburban Houses.

The purpose of this practical activity is to clarify the new value of "home" in the changing social environment due to the pandemic and the increase of vacant houses through the case study of the renovation of an apartment with a workshop that we designed. Therefore, as part of the research for the design, operation, improvement, and disclosure of the renovation plan, we conducted a dialogue about "moving" with professionals and artists outside the field of architecture, and analyzed the results. Based on these practices, we hope to reconsider the value of "home" and show how to renovate and operate vacant suburban houses that exist throughout Japan.

#### 1. 実践活動の背景と目的

本実践研究の背景にはコロナウイルスによる働き方や住まい方等の社会環境の変化と、全国の空き家の増加がある。こうした社会環境の変化は現在進行形であり、迅速な対応が求められるが、空き家に関しては有効的な活用方法は具体的に示されていない。加えて、空き家の数は年々増加傾向にあり、平成30年度時点で全国に846万戸を越えている。その他にも、空き家を改修するための費用の不足や管理体制の不備等が指摘されている。

こうした状況に重なるようにして、世界中ではコロナウイルスによるパンデミックが始まり、日本では2020年に初めての感染者が確認されて以降、今日に至るまで感

染者は確認され続けている。我々の生活はそれ以前のものとは大きく異なり、働き方や住まい方、移動方法、共同体の在り方など多岐に渡り、影響を受け続けている。とりわけ、働き方の変化における「家」の役割の変化は顕著である。コロナ以前ではオフィスに集まり働くことが主流であったが、コロナ禍においてそうしたことが難しくなり、テレワークが増加した。仮にパンデミックが収束したとしても、こうしたテレワークをはじめとする新しい働き方と生活のサイクルは一つの習慣として私たちの社会生活に根付くと考えられる。こうした働き方の変化は我々の働く場所と住まう場所を近接させるもしくは、一体化することで、働く場所が都市への一極集中か

\*<sup>1</sup> 建築設計事務所 GROUP 共同主宰 \*<sup>2</sup> 建築設計事務所 GROUP 共同主宰 \*<sup>3</sup> 建築設計事務所 GROUP 共同主宰・一般財団法人 窓研究所 スタッフ

ら郊外地域へと移動している事例のように住まう場所の移動も引き起こしている。

実際に、神奈川県海老名市に設計した工房付きアパートメントでは、空き家であった既存長屋を改修し、都心から住まいを移動し、都市では利用できない広々とした工房で製作を行なっているアーティストもいる。そこで、こうした社会的な環境の変化における移動、つまり「引越し」を改修計画及び実践のコンセプトとして掲げた。そして、設計・運営・改善のためのリサーチとして建築分野以外の専門家・芸術家へ「引越し」をテーマにインタビューを行ない、実践へとフィードバックした。

以上の一連の活動を通じて、パンデミックによって起きている様々な社会環境の変化によって生じた移動を「引越し」を切り口に建築以外の分野の方々で議論し得られた知見を実践へと反映し、課題や展望を開示することが本実践研究の目的である。

## 2. 工房付きアパートメントについて

まず初めに、私たちが今回設計を行なった建物に関する設計概要や運営方法を含む竣工後の活動を明らかにし、郊外地域における職住の近接した暮らしにどういった課題があり、知見が得られたのかを明確化する。

### 2.1 建物概要及び設計方法

設計の概要を簡単にまとめる。今回私たちが改修の設計を行なった建物は、2021年2月に竣工した、工房付きアパートメントである。敷地は神奈川県海老名市で、都心か

ら車で1時間30分ほどでアクセス可能な郊外に位置する。7棟の長屋のうち2棟の共用棟として工房にし、4棟はアパートメント、1棟は改修前の住民の棟として改修を行なった(図2-1)。

次に設計方法を示す。既存建物は、平成の初めにハウスメーカーによってつくられた7棟が連なる長屋形式の集合住宅であった。一見、均質な長屋が並ぶ単調な空間であったが、そうした中でも幾つかの過去の生活の痕跡を確認することができた。例えば、庭に放置されたBBQセットであったり、壁にできたシミであったり、ゴミ捨て場の覚書であったりとそれらは通常の建築設計で見逃されてしまいそうなモノたちである。建築竣工時の形だけでなく、そこに住む人の物語が残された生活の痕跡によって建築の場所性が変化していくこと。普段、建築の竣工後は住民の生活がつくる痕跡を取り扱うことは難しいが、私たちはこの変化に着目することで、生活によって生まれる痕跡が建築の形にフィードバックを与えるような、建築の形とそこで営まれる生活との新しい関係を作ることができないだろうかと考え設計を始めた。

まず、家に残された生活の痕跡について、形だけではなく、そこに残る物語も含めて考え、新たに生活の痕跡を作り出すために、設計者である建築家、映画監督、劇作家・写真家と共に、俳優やダンサー、音楽家の9名がその場所に実際住み、共同生活を行なった。生活する中で、長屋に積み重なっていた痕跡を、写真や映像として形に留め、生活の痕跡として扱った(写真2-1)。

そこに写っているものは、食事の様子であったり、庭の

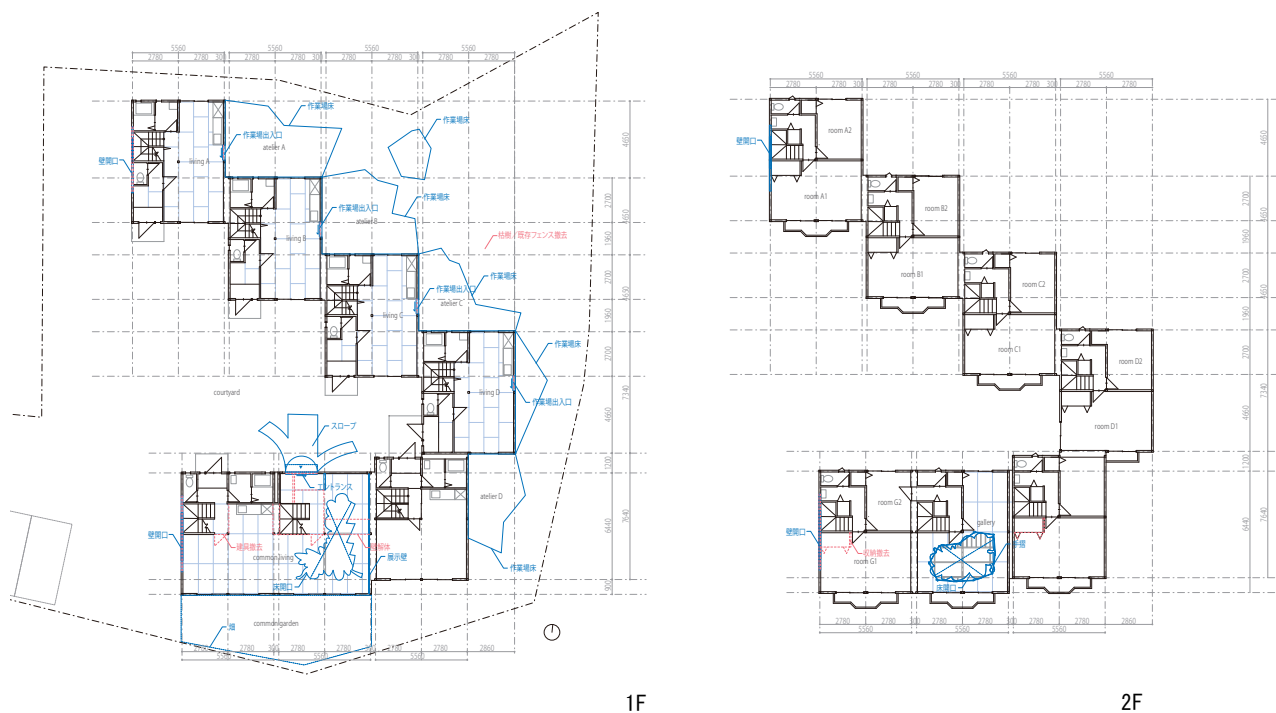


図 2-1 改修後の平面図



図2-1 写真や映像で生活の痕跡を記録している様子

植物であったり、部屋に差し込む光であったり、中には私たち設計者が映り込んでいるものもあった。それらの記録から、生活の痕跡の「形」を取り出しコラージュし、外壁に各部屋をまたがった曲線の開口、共用棟の吹き抜けと床、北側の作業場に通ずる扉を作った(図2-2)。これは既存建築の中に、柔らかい光を取り入れたり、座ったり、ものを置いていたり、使い手が思い思いに使うことのできる「形」となった(写真2-2)。

今までの多くの設計業務は、設計者とクライアントの二者のやりとりによってつくられてきたが、本設計においては設計者とクライアントという枠組みを超えて、多様なアクターが住みながら設計に関わることで設計と生活という線引きが曖昧になっていった。結果として、設計

と生活が相互に関係しあい、単なる設計業務として設計者が一方的に案を作り、建築を形作る仕方ではなく、建築が生活の中で変化し続け、生活も建築によって影響を受けていくような建築とそこで営まれる生活の間に双方向性がうまれてく。こうした双方向性は建物が竣工した後も、ここで過ごした人たちがこの場所に関わり続ける要因にもなっており、振り返ると重要なプロセスであった。

現在では、全ての部屋に住人が住んでおり、私たち建築設計コレクティブのメンバーやアーティスト、編集者、写真家がここに住み、日々何かを作りながら、その生活に合わせて建物を改修しつつ暮らしている。

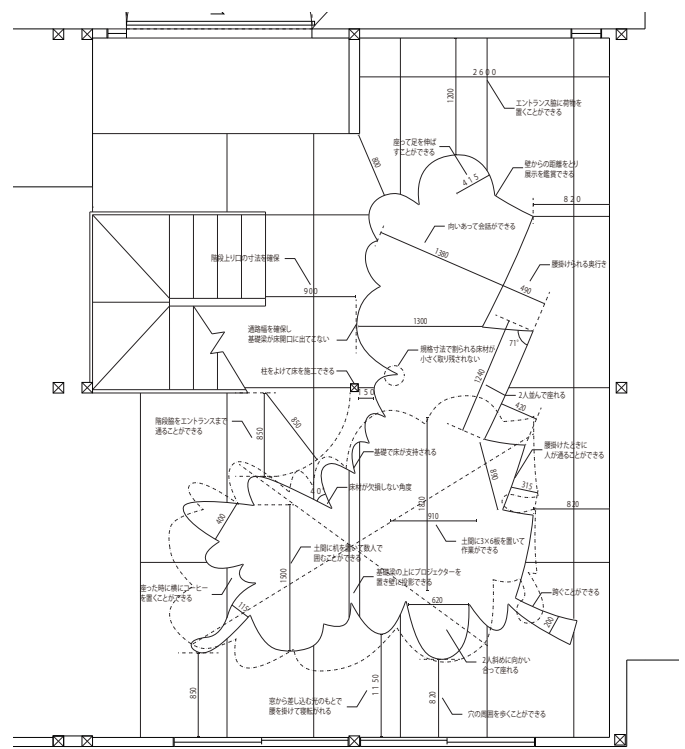


図2-2

竣工前の生活の痕跡のコラージュ共用棟開口平面図

実際の共用棟開口平面図



写真2-2 共用棟の様子

## 2.2 運営方法

上述のように、竣工後から現在も全ての棟に入居者がいる状態が続いている。各棟の家賃は個別に設定されており、共用棟は住人やその関係者であれば無料でいつでも使えるようになっている。共用棟の管理においては、住人同士でやり取りが行われ、現在では日常的な制作の場として機能している（写真2-3）。

運営では、建築家である私たちとクライアント兼オーナーとの月一回の打ち合わせを重ねることで、竣工後の建物の状態の共有、イベントの企画、ホームページの作成等の運営も共同で行なっている。一般的なアパートメントの事例では、竣工後の建物の運営に建築家が関わっておらず、建物のその後の様子はブラックボックス化するというケースも見受けられた。そうした、一方通行な運営方法ではなく、定期的な打ち合わせを重ねることで、様々な関わりしろを持った建物になっている。

具体的には竣工後、アパートメントのホームページの開設とイベントの開催を行なった（写真2-4）。

アパートメントのホームページはオーナーとの打ち合わせの中で生まれたアイデアであり、アパートメントという私的なプログラムでありながら、そこに住む人以外でもこの「家」に関わることでできる開かれたプラットフォームとなっている。そこでは、この設計プロジェクトの関係者や住人が制作したプロダクトの販売やイベントの告知を行っており、誰でもアクセス可能である関係の人たちもイベントを介して、都市から離れて活動するアーティストと接点を持つことが可能になる。イベントでの収益は主催したアーティストに入る仕組みとすることで彼らの活動を次につなぐ仕組みとしている。つまり、この場所は金銭的な支援や制作の場所の提供にとどまらず、ホームページやイベントの開催などこの建物から派生的につくられたコンテンツを含め、一つの広告メディアとして「家」の枠組みを超えながら様々な情報発信を行うことで、アーティストの持続的な活動を支え、それぞれの領域を拡張するような場となっている。



写真2-3 共用棟の製作風景



写真2-4 ホームページ上でのイベント告知

このようにして、「家」という私的な側面が強く表れる機能に対して、ハードの側面だけでなくソフトによって建築を開く実践を行なっている。こうした実践によって建物は断続的に手が加えられることで放置されることなく場所が使いこなされ、新たな生活の痕跡を生み出していく。さらに、都市から離れたアーティストの活動もホームページを介して都市とつながることで、自身の活動を広々とした工房で精力的に行うことが可能である。最近では出産を控え、今後制作だけでなく育児との両立という新たなフェーズに入るアーティストもいる。「家」という機能は内包されながら、こういった形でこの場所が使用されていくのには見守っていきたい。以上のように、竣工後も設計者が持続的に関わりを持つことで、こうした幾つかの運営における知見を獲得できた。

### 2.3 運営と管理における課題

2.2では工房付きアパートメントの運営方法を示しながら、具体的にどういった形で使用され、それらがもたらす効果的な側面について明らかにした。一方で、幾つかの課題点も同様に明らかになった。ここでは、そうした課題を明らかにしつつ、今後の運営に向けて、現状の改善方法と展望を示す。

まず1点目は、共用棟のメンテナンスである。先ほども示したように、共用棟の利用は住人やその関係者であれば基本的に自由に使用できる。そのため、この場所の管理体制が曖昧になっており、何度か作業が途中の状態のまま放置されていたり、廃棄物と制作物が混在して保管されている状態も見受けられた。

2点目は、イベントの収益化である。現在イベントの収益はその主催者に入る仕組みである。この方法はアーティストの活動を支えるためであり、そこでの収益が建物の管理費や運営費としてオーナーや共同運営の私たちのもとにまで回っていない。現状はこうしたキャッシュフローであっても、問題なく回っているが時間の経過とともに建物の管理や備品の更新等の必要性が出てくることは明らかである。そこで、今後の建物の管理やこの場所を通じた更なる取り組みを行う上で、新たな事業計画を模索しなければならない。

以上の2点が現状の運営における課題として挙げられる。

1点目のメンテナンスに関しては、住民間でのルール設定が必要であると考えている。理想を述べるとすると、そうしたルールなしに住民主導で行われるべき問題とも言えるが、住民やその関係者の利用であるものの不特定多数の人が利用しているため一定の水準を保つルールが必要である。

次に2点目の事業計画であるが、これに関してはいくつかの具体的な解決策が考えられる。例えば、イベントやホームページを介して売れたグッズや制作物の収益を一部オーナーに入れ、建物の実質的な管理をおこなっている我々にその一部を管理委託費として払ってもらう形である。本来であれば、このような形で運営を進めていくことが理想的であるが、実質そこまでの収益を上げれていないことも現実である。もう一つは共用棟の一部に収益を得られるプログラムを入れることである。現在の共用棟は法律上、オーナーの住居でありそれを住民に無料で貸し出すという形式の運営方法であるため、希望者にその場所を無料で貸し出し、物販や飲食営業を行うことで、そこでの収益の一部を施設管理費に当てるといったものである。しかしながら、こうした駅から遠く都心から車のみのアクセスしか容易でない場合はこうした業態は営業が難しいようにも思える。そこで、住民を含めアーティストの知り合いが設計者の関係者に多いことを

考慮すると以下のような事業計画も考えられるのではないだろうか。

例えば、アーティスト複数人によるグループ展を開催する場合を考えてみる。都心ではギャラリーを借りる場合一日数万円程度かかる場合やそれほどの展示面積も期待できないことがある。そこで、共用棟を無料で貸し出し、キュレーターが選んだアーティストがその場所で展示を行う。そこでの収益の一部をオーナーへと渡し、設計と運営をおこなっている私たちに運営委託費として渡す。オーナーはさらにそこから共用棟の持続的な利用を可能にするための設備投資を行うことで、住民は設備の整った場所を無償で利用することが可能になる。それ以外の展示収益をキュレーターとアーティストが貰い、展示期間の共用棟の運営を展示期間のみ代わりに行ってもらうという計画である(図2-3)。

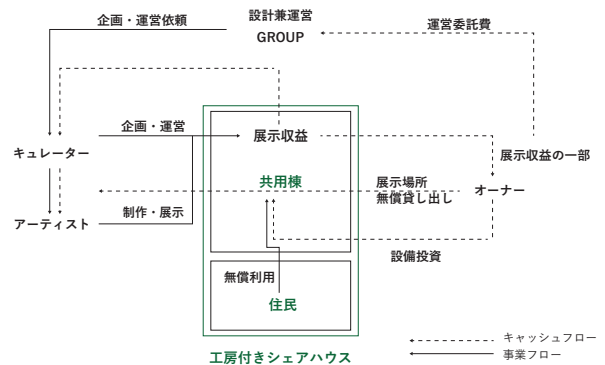


図 2-3 グループ展をおこなった場合の事業計画

展示収益がしっかりととれることを見込んだ計画ではあるため、その額が低い場合はキュレーターやアーティストにはいくらかオーナーから支払うことも必要な場合も考えられる。

運営や管理に関する課題は今後の建築設計という枠組みの中に入り込み、我々設計者も考えていかなければならない重要な問題である。さらに郊外という場所においては、都心のように人が多くいないため、資金調達、その運営は都市におけるそれとは異なる方法論が必要である。そうした1つの方法として、都市がもつ場所のネットワークではなく、様々な方法を用いて人的なネットワークを繋いでいくことによって、間接的にでもその建物に関わることでできるステークホルダーを増やしていくことが可能ではないだろうか。加えて、運営に設計者自ら関わることで、単なる運営ではなく継続的な建築への介入も可能となる。そうした間接的かつ継続的な介入は、現在進行形のパンデミックによってあらゆる事柄がオンライン化する現代において、離れていてもその場にコミットできる仕方が増えたことで後押しされた。こうした変化は郊外の空き家が増加している地域にとっても新たな

な地域の在り方の兆しになるのではないだろうか、我々も引き続き模索しながら実践へと繋げていきたい。

### 3. 「引越し」について

2章では、設計した工房付きアパートメントでのコロナ禍における活動を通して、知見と課題を明確化し、今後の展望を示している。そこでは、パンデミックという世界的な状況下での我々の具体的な活動を扱ったが、3章では2章で指摘した実践と課題をもとに、引越し(=社会環境の変化における移動)について建築以外の専門家にインタビューを行い、多角的に「家」の価値について分析することで今後の運営への有効性を検討する。

#### 3.1 「引越し」に関するインタビュー

以下に各インタビューの内容を順番に示し、得られた知見や実践における課題を明らかにする。

##### ■URG(Urban Research Group)

まず初めにインタビューを行ったのは、アーティストやキュレーターとして活動するアートコレクティブURGの3人、石毛健太、垂水五滴、黒坂祐である。インタビューでは彼らが2019年に開催した「引越し」がテーマの展覧会「東京計画2019 vol.3」を振り返りながら、団地における引越しやアーティストの制作とその場所の関係について議論した。

初めに彼らの行った展覧会では、「引越し」という行為が個人的な要望や欲望から能動的に行われること以上に、複数の社会的な要因が複雑に重なり合った時、そうした外圧によって引越しを余儀なくされるケースが多いことが指摘された。こうした移動の中には、出産や進学といった場所の移動の中に喜びや希望ともなう形だけでなく、自然災害や家庭環境の悪化などやむを得ない残酷なケースも多くあるということが彼らの経験として語られた。次に、彼らが過ごした団地での生活やそこから郊外へ引越しを行ったことについてインタビューが進んだ。

URGのメンバーの黒坂はコロナ禍に東京から地元の近い千葉県へと引っ越し、車を購入。移動が電車から車へと変わっていたと話す。さらに、そこでの生活は車が中心となり、公共的な場所での人との触れ合いが少なく、知らない人に対しての不信感が強いため、郊外は居心地がいいと語った。つまり、こうした引越しが引き起こした移動方法の変化が、人との付き合い方まで変えたのである。

メンバーの石毛は団地内の引越しに関して、ある地域に集合した団地には、都営・賃貸・分譲と言ったように団地内にヒエラルキーが存在しているとし、団地内での移動はその世帯の直接的なヒエラルキーと結びついていると述べている。こうした団地内のヒエラルキーは学校やゴミ捨て場など地域内の多様なレイヤーのなかに潜み、

生活やコミュニティなど多方面に影響を及ぼした。

最後にアーティストと制作場所について述べられた。まず大前提として、日頃から作品を発表するそのメディアによって変わってくるという。例えば、黒坂のメディアは絵、垂水は映像インスタレーション、石毛は彫刻と言ったように。ペインティングや彫刻は、スタジオがないと死活問題のため、広い場所を必要とし、郊外に行く事例が多い。彫刻も製作所を居抜きで借りる場合が多く、そうした場所に偏る。こうしたことを踏まえると、制作場所を都内に持つことのメリットは多くないことが伺える。

##### ■大橋香奈

大橋香奈は人びとの「移動」の経験に関する、映像エスノグラフィーの研究者である。インタビューでは、彼女がどういった方法で移動について研究を行っているのか、研究活動の中で制作された「移動する家族」について伺った。そして最後に、引越しについて自身の経験を交えて話を聞いた。

彼女は元々親族の関係上、多くの移動を繰り返す環境の中で育った。こうした環境のなか、在学中に取り組んだフィールドワークをきっかけに映像エスノグラフィーを用いた研究に取り組み、世界の国々を調査、映像で記録をし、それを基に多くの人と議論を重ねてきた。彼女の研究活動の中で、特にリファレンスとして挙げられていたのが、社会学者のジョン・アーリが書いた「モビリティーズ-移動の社会学」である。この書籍では「移動」について5つの要素があると述べられている。

1つ目は、身体的な移動。仕事や休暇や、家族のケアなどの家庭を成り立たせるための移動から、楽しみのための移動、移住や逃亡といった身体的な移動がある。

2つ目は、商品やお土産、贈り物といったモノの移動。

3つ目は、メディアに登場するイメージを通して行われる、想像による移動。

4つ目は、バーチャルな移動。

5つ目は、コミュニケーションのために行われている様々な通信を介した移動。

彼女はこのコロナ禍において4つ目のバーチャルな移動に注目した研究を行った。コロナ禍で身体的な移動が制限された結果として、「あつまれどうぶつの森」をやる人が増加し、ステイホームしている間にゲームというバーチャル空間のなかに、自身のホーム(=拠点)を作る人がいた。研究としてはそのゲームのユーザーに自身のホームを案内してもらい、彼女がゲーム上でフィールドワークを行うというものである。

興味深いのは、コロナ禍において移動が制限され人々が自身の活動の場を現実世界からバーチャルの世界へと移動していったことである。こうした世界では、現実の世界同様に友人のホームを訪ねたり、普段マンション住ん

でいる人が庭を欲しがり、ゲーム上には大きな庭を作ったりしていたのである。さらには、友人が自分のホームを訪ねてくる際、まるで現実世界の自分の家のようにゲーム上の家を片付けるような人も居たと言うことは非常に興味深い内容である。つまり、移動が制限された私たちは自身の領域を現実世界から仮想世界へと拡張していき、その世界にも現実世界での振る舞いや身体性が保存されていたのである。

最後には大橋自身の引越しの体験も含めて、移動に伴うホーム（＝自分の場所）をどのように立ち上げるのかについて話し合われた。彼女自身も20回以上の引越しを経験し、多くの移動の中で、彼女もホームについて考えたことがあったと言う。フィンランドに住んでいたとき、3年間常に持ち続けていたものを記録していた。結果的にはジーパン、スニーカー等の履きやすいものや、iPadとパソコン、あとは日本製の竹の耳かき、お箸と海外対応の炊飯器で、ものとしては全然持ち歩いてなかったそうだ。彼女はそうした状況を振り返り、パソコンやiPadが象徴しているように人間関係を持ち歩いてきたと話した。

こうした彼女の研究や体験からもわかるようにインターネットが加速的に進む現代において、「家」の価値が大きく変わりつつある。インターネットの普及は離れている人同士の繋がりを生み、時には仮想空間でのコミュニケーションも可能にしている。仮想と現実という二項対立の関係ではなく、互いの領域が曖昧になり、そうした二項間を行き来しながら、時に混ざり合う関係性へと変わってきている。こうした変化は我々が「家」と見なす領域の拡張であると考えられる。

上記のように、社会環境の変容によって生まれた新しい移動は我々の住まいや生活を従来の定住し、その地域における村社会的なコミュニティに属する在り方から身軽な移動が可能で、様々なコミュニティを自己選択できる新たな在り方への変化を示唆している。

#### ■堀田あゆみ

モンゴルを専門に研究する文化人類学者である堀田にインタビューを行った。インタビューでは、ゲル内部に置かれるモノや空間の変化について伺いながら、モンゴル人独特のモノに対する考え方を日本人との違いを交えながら議論された。他にも、ゲルがどのように移動をし生活を営んでいるか、さらにはそうした定住しない生活の応用可能性を考察した。

このインタビューで初めに注目したいのは、共営世帯という考え方である。共営世帯というのは、同じ場所に宿営してお互いの家畜の群れを統合して一緒に管理するパートナー世帯のことで、季節移動ごとにメンバーが変わっていく世帯の在り方である。相手を選ぶ基準が設けられていて、労働力や家畜数によって判断される。例え

ば、もうすぐ結婚する娘や息子がいる場合、彼らに家畜の分与をする必要あり、その数を700や800頭へと増やしていく。しかし、800頭を持っている世帯と、他の800頭を持っている世帯が共営世帯になった場合、周辺の草が直ちになくなってしまう。そこで、家畜が多い世帯は少ない世帯と組もうとするが、少ない方としては多い世帯と組む場合、家畜の世話の共同を強いられ手間が増えてしまう。こうした様々な条件を折り合いながら季節毎に組む世帯が決定される仕組みをモンゴルの遊牧民は持っている。

2章では工房付きアパートメントの共用棟の運営の課題を指摘したが、共営世帯の仕組みはこうした場所の運営方法としても十分応用可能である。つまり、ある特定の人が運営や管理に関わり続けるのではなく、その都度状況によってその場所を共同で管理していく人を変更しても良いのではないか。とりわけ、今回の実践のように関わる人数が多い場合はそうした方法が有効であると考えられるが、継続的な話し合いが必要であったり、責任の所在がわかりづらくなるなど新たな問題が生じる可能性を孕んでいる。

#### ■滝口悠生

滝口は小説家である。インタビューでは、空間や人の記述の仕方を含む小説を書く上での表現について、普段の生活や小説の執筆活動を行う場所など働く場所と住む場所の関係性を伺った。

今回のインタビューでは、滝口は家族を含め職業柄、自宅で作業を行うことが多く、職住近接の環境の中でいくつかの気付きを与えていただいた、そうした事から「家」で働くことの可能性を考える。

滝口は小説を書く場合、書き進められている時は場所を選ばないが、書きはじめの時期や書きあぐねているような時は場所がとても重要であるとのこと。コロナ禍によって家族が家で仕事をするが増え、自分の仕事する部屋を移り、以前仕事していた1階の部屋を妻に明け渡し、本を詰め込んでいた2階の部屋を仕事場とした。その場所は、机に向かうと窓が目の前に来る環境になっていて、すごく良かった。今は隣が小学校で、前に住んでいた家では近くに中学校があり、窓を開けておくと学校の音が聞こえてくる、環境が似た状態で偶然仕事することが出来ていて、それは1階の部屋で仕事をしていた時よりも良くなったと語る。

こうした働く場所と住む場所の関係は特に個人や少数人数によって制作を行う場合は重要である。住むことと働くことが生活の中でシームレスにつながっており、時には混ざり合うことによってどちらかに軋轢が伴う場合も少なくない。コロナ禍においてそうしたことが表面化したことは言うまでもないが、こうした問題は住宅の内部だけでなく、広く都市の問題でもある。都市という場所は

働く場所と住む場所を用途ごとに分けてきた歴史があり、現在の日本の都市構造においても、都市に住む場所を集中させその周縁部を生活の拠点を取り囲んでいる。こうして職住は分離し、我々の生活は交通網によって結ばれたのである。しかし、コロナや時代の変化によって我々の働き方は大きく変わりつつある。働く場所と住む場所が近接もしくは一体化しているのである。であれば、もう一度私たちは働く場所と生活を行う場所の在り方を再考する必要がある。こうしたことは既に様々な状況で要求されており、私たちの実践と地続きである。

### 3.2 インタビューのまとめ及び「家」の価値の分析

上記では分野横断的なインタビューで得られた知見や課題を明らかにしたが、私たちはそうしたアーティストから研究者まで様々な異なるバックグラウンドを持った人々によって「引越し」及び「移動」における共通の見解も明らかになったのではないかと考えている。その一つとして、家の領域の拡張とそれに伴う運営制度の問題が挙げられる。

URGの黒坂さんはコロナ禍に自身の拠点を東京から千葉に移動し、交通手段として車の購入、郊外と都心をつなぐように生活を行うことで自身の領域を拡大している実践者であった。彼らはアーティストとしても活動しているため、周りのアーティストや日々制作を行う人々が都心に活動の拠点をもち、郊外にしながら都心で展示を行ったり、SNSを活用して自身の活動を多くの人と共有することが可能になっていると制作と場所の関係を指摘した。

大橋のインタビューでは、大橋がジョン・アーリーを参照にしながら、「引越し」を「移動」という概念の一部として捉え、我々の環境変化における人やモノの移動がバーチャルな空間にまで侵食していることを指摘した。文化人類学者の堀田はモンゴルの研究を通して、移動しながら生活を営む文化の中で育まれた拠点や領域の作られ方、考え方が自然との折り合いの中で決定されていることや、そうした生活を送る上で共に運営し、暮らすことの重要性を指摘した。

滝口はコロナ禍における職住一体の暮らし方の実践者として課題を共有し、これからの社会の中で「家」が住むための場所だけでなく可能性について再考した。

時代が進むにつれてインターネットを通じて、生まれつつある自身の拠点や領域の拡大は、私たちが今まで抱いていた「家」の領域が単なる現実空間から仮想空間を含めたより広義の意味で扱われていることを示している。そして、現実の空間においても私たちは以前のように仕事場や活動の場が、賃金が高く、場所の狭い都市に存在する必要性が薄くなってきており、職住一体の暮らしの実践者も既に存在する。こうしたことを踏まえると、以

前では難しかった都市と離れて生活を行うことがテクノロジーの進歩や社会状況の変化によって現実味を帯びてきており、今までと異なる「家」の在り方が浮かび上がってきている。そうした新たな暮らしや働き方には、以前の方法論ではない新たな方法論を必要とするが、そうした中で、堀田が述べた共同運営は郊外という都心とは異なる場所において有効であり、今後の実践へと活かせる示唆を与えてくれた。

## 4. 総括・展望

私たちは工房付きアパートメントへの改修における設計のプロセスを示し、現在の運営や使用状況について明らかにした。そこでは、一般的な施主と設計者という枠組みではなく設計以前から設計者を含めた数人が住まいながら設計が進んでいくという通常と異なるプロセスによってつくられたことで、単なる住まいとしての機能だけでなく、多様なステイクホルダーを巻き込み、工房を併設することで、アパートメントのホームページの開設など外部との関わりしるを持つことが可能となった。運営においても、こうした外部との有機的な関係性によって建物自体への持続的な手入れを必要とさせ、工房という住むこと以外の空間が放置されることなく現在でも様々な人々によって使いこなされている。一方で、工房では不特定多数の利用によって管理が難しいことやオーナーを含む運営側への収益化など使われることで見えてきた問題も明らかになった。加えて、改修後も運営として関わり続けることで見えてきた課題や知見を共有し、それを基にした新たな運営方法も示した。

3章ではコロナウイルスによって郊外の空き家へと移動を伴った本実践と引越し（＝社会環境の変化における移動）として捉えることで、共通点を見出し、建築以外を専門とする様々な人たちへ「引越し」に関するインタビューを行った。そこでは、実践における課題や知見を基にインタビューを行い、運営に対する新たな展望や社会環境の変化における「家」の価値について共に再考した。

今後は本実践研究を通して、アパートメントでのイベントや運営の収益化、運営と管理体制の再構築が引き続き取り組むべき大きな課題であることが明らかとなった。こうした課題を様々なメディアを通して広く社会と共有することで、今後の空き家の利活用を結びつける建築的な知見を広げていくことを実践を通して引き続き行っていきたい。本実践を一過性のもとはせず、関わり続けることで、長期的な知見を獲得し、変わり続ける社会環境の中で「家」がいかなる役割を担うのか考えていきたい。

### <謝辞>

本実践活動にご協力いただいた多くの方に感謝します。